

発達神経学の巨人H.F.R. Prechtをしのぶ

小西 行郎

日本赤ちゃん学会理事長

ベビーサイエンスに追悼文を載せるのは2回目である。1度目は、2002年、赤ちゃん学会の立ち上げを共に推し進めた岡戸信男教授を喪ったときであった。その悔しさもまだ記憶に新しいというのに、岡戸教授を私に引きあわせてくれたプレヒテルにも逝かれてしまい、大きな星を見失ったような気持である。

プレヒテルの名著「Continuity of Neuronal Functions from Prenatal to Postnatal Life」の共同執筆者として岡戸教授がオランダに招かれたことはあまり知られていない。この書は初めて胎児期の行動発達から連続するものとしてヒトの行動発達を捉えようとしたものであり、いまだにこうした書はない。彼の業績は新生児神経学的診断法を開発したこと、ステート(State)という概念を構築したこと、さらには胎児期から乳児期に見られる自発運動、すなわちジェネラル・ムーブメント(General movements:GMs)を発見したことなど数々あるが、極めて先進的であり重要であるのは解剖学、生理学などの基礎医学から産婦人科や小児神経科の臨床医学のみならず、認知発達心理学や情報工学など異分野の研究者によるグループを構成し、世界で初めて発達神経学講座を開設したことであろう。(小児神経学のタウエンやハダースーアルフラ、発達心理学のアインスピーラなどプレヒテルの学派は発達神経学においてすぐれた研究者を輩出している)。この書はこうした彼の研究を集大成したものである。

今日でこそ、異分野による学際的研究の必要性が強調されるようになったが、既に30年前にこうしたグループを構築していたことは彼の先見性の高さを物語っている。赤ちゃん学会を設立しようと真剣に思ったのは彼からのアドバイスがあったからであり、彼の紹介により岡戸教授と出会ったこと、複雑系の研究をされていた多賀先生と出会ったこと、さらに学会設立より20年も前から赤ちゃんを研究されていた小林登先生に協力を得たことなどが学会設立の大きなきっかけになった。

さて、わが師プレヒテルであるが、ローレンツの弟子にして動物行動学に飽き足らずヒトの行動学研究を始めた人であるから、その研究に対する態度は極めて厳格であり、科学的であった。卒後15年経ち小児神経学をそれなりに学んだつもりでいた自分の知識が彼との話の中で根底から覆され、初めて会ってからの2週間、私はまさ

にパニック状態になった。しかしながら、繰り返し、繰り返して彼の本を読み、会って討論をするうちにだんだん気持ちよくなってゆく自分を感じるようになっていった。今まで学んだ小児神経学は捨ててもいいと思ったし、ここで学んだことを帰国後も続けることで諦めかけていた研究の道に復帰できるような気がした。

人を対象にした研究で個人差や個体内差に触れていないような論文は受け入れられないとか、観察時間は何時間が適切か、有意差とは何かというような基本的な問いかけが幾度となく繰り返され、その度に作成したデータを破り捨てなければならないということが続いた。

不思議なことに一度も反発したいと思ったことはなかった。突き返されるたびに「いい勉強したな」とニコッと笑って同意を求められると、なぜか嬉しかったことを思い出す。極めて厳格な研究者としての一面から『皇帝』のようと言われる一面があったが、私には厳しいだけではなく、やさしさとユーモアにとんだ一面も見せてくれたことが懐かしく偲ばれる。

赤ちゃん学会は今年で設立15周年を迎える。学会内の研究者の交流はますます盛んになり、異分野の研究者による共同研究も飛躍的に進んだ。國吉教授に統括された新学術領域研究『構成論的発達神経科学』はまさにプレヒテルの発達神経学教室そのものである。しっかりと彼の理念は赤ちゃん学会に根づいたと確信している。

人生は人との出会いによって変わる。私の人生はプレヒテルによって変えられ、大きな夢を与えられた。彼と出会って後の私の研究者人生は幸せであった。

こころから感謝の念を込めてプレヒテルへの追悼文としたい。

